

---

# 真夜中の香霖堂

紅魔館雑務総括

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真夜中の香霖堂

### 【Nコード】

N5624F

### 【作者名】

紅魔館雑務総括

### 【あらすじ】

こーりんは変態という固定概念を打ち砕くべく！私は立ち上がった！・・・うそです。妄想の産物です。えっと。。。十二時を過ぎると、香霖堂は姿を変える。そして、そこに集まる七人の常連。ちよっとかつこよくなる真夜中の霖之助。・・・・・・・・一人でちよっとしんみりしたいときには、彼のところに行くといい。って慧音が言ってた。一話一話が独立しているので、暇なときに見てくれるとうれしいです。

C a s e 1 : 八雲 紫・比那名居 天子（前書き）

こーりんはヘンタイじゃないもんっ！

普通の青年だもんっ！

むしろ普通じゃなくてかつこよくなれよこーりん！

そんな心が生み出した駄文、お付き合いくだされば光栄です。

Case 1：八雲 紫・比那名居 天子

昼間は雑貨・・・いや雑物店としての顔を持つ、魔法の森の奥にあるやや小さめの店・香霖堂。

開店は大体9時、閉店は決まって18時・・・。。。だが、それはあくまで人間の里や妖怪の山などの多くが知る時間帯。

「・・・・・・・・そろそろか」

ごく一部の人間や妖怪の知る『香霖堂の本当の楽しみ方』（と言うのもどうかと思うが）というのが存在するらしい。

時刻は午前0時。傍<sup>はた</sup>から見れば今の霖之助の格好は、『ストーブに当たる雑物店のバーテン』。馬鹿らしいにも程がある。

「・・・・・・・・」

慣れた手つきで違いの判らない壁を押す。その部分、四角形に壁はへこみ、レバースイッチが現れた。それを霖之助は下ろす。

ごっこ、という音が鳴り、すぐに止まる。直後、商品の置かれていた棚は後ろへ消え、清潔感のある・・・とはいえないが、味のあるダークブラウンの壁が店内を覆っていく。そして、霖之助のいた場所の側からストーブは消え、何処かはわからないが空調が効き始めた。

霖之助の目の前の床がスライドして、カウンターが現れた。<sup>おもむき</sup>徐に力ウンターへ向かうと、上から音もなく酒類の乗ったウッドラックが。 「・・・・・・・・さて、今日も夜は長いぞ」

それは、『真夜中の香霖堂』開店の合図。明かりは薄く、黒を基調とした色合いがバーを思わせる。

バーテン姿の霖之助は、それなりに様になり、グラスを拭き始める  
とそれらしく見える。

「そろそろかしら？」

「開いているよ」

からからと扉を開く音と共に現れたのは、境界に潜む妖怪・八雲  
紫。『夜の香霖堂』月曜の常連である。

「そうそう、後からもう一人来るから」

椅子に座り、紫はそう呟いた。

「おや、君が誰かを連れ込むとは珍しいね。それほど親しいのかい  
？」

「いいえ、最近親しくなったのよ。・・・ユニブランのコニャック  
を戴けるかしら。出来ればエクストラで」

「うちのエクストラはユニブラン以外置いてないよ。ストレートで  
？」

「ええ、よろしく」

「畏まりました」

えーっとエクストラ、エクストラ・・・と、いつている間に、霖之  
助はグラスとボトルを取り、慣れた手つきで注ぎ、紫の目の前に置  
いた。

「コニャック、マーテルのエクストラ。味も重視して作られている  
はずだよ」

「あら、相変わらずいい薰りね。ブランデーはこうでなくちゃ」

「最近の粗悪品は香りの深さが足りないからね。品定めにはなるべ  
くテイ스팅グするようにしているよ」

グラスを軽く振って、紫は口に運ぶ。んー、と呟いて、再びグラス  
をテーブルへ。

「本当、薰りだけじゃないわね。相変わらず貴方の目利きには感心  
させられるわ」

「恐縮だよ、君にそう言ってもらえるとは」

霖之助自身もグラスにヴァン・ド・テーブル（飲みやすく、安価な

デ일리ーワインの類）を注ぎ、嗜み始めた頃。

「あのー・・・香霖堂っていうのは、ここで・・・あつての・・・？」

からからと音を立てて入ってきたのは、白のシャツとパステルブルのスカート、黒基調で桃と羽根の飾りが為された帽子をかぶった、青い長髪の少女。

「ああ、天子。こつちよ」

「いらっしやいませ」

一応礼儀として顔には出さないが、こういう店に来るには少しばかり雰囲気として子供っぽい気がする。

「霖之助さん、この子にも何か。ああ、お酒はそれほど濃すぎない奴をね」

「・・・では、カクテルでも」

「たまには、フロートでもやってみてほしいものね」

「・・・はあ、あまり得意ではないんだがね」

薄めの酒を二本用意、重い方をゆったりと入れていく。  
完成したものにマドラーを添え、天子に手渡した。

「ふ・・・今日は何だか調子が良かったな」

シトロン・ジエネヴァ（レモンから造ったりキユール）とオールド・トム・ジン（スピリッツの類）のプース・カフェ・・・組み合わせ的には少々どうかとも思うが、酒の飲めるお子様らしき天子には大丈夫だろう、と踏んで霖之助は出した。

「・・・混ぜてもいいのかしら」

「ええ、混ぜないと多分カクテルとは呼べないから」

なれない手つきでマドラーを回し、グラスを口へと運んだ。  
「・・・！！」

グラスを置き、少々驚いた様子を見せて、天子は呟く。

「口当たりの刺激が砂糖で軽くなってる・・・レモンぽい味もするけど、それほどきつくないわ。香りもいいわね」

「舌が肥えていらっしやるようで・・・」

霖之助は少し驚いたようで、拭いていたグラスをカウンターに置いた。

「この子天人生まれだし、仕方ないんじゃないかしら。子供なのに、よくこのお酒の味がわかるわねえ」

「馬鹿にしないでよね。私だって、これくらい出来るんだから」  
少し意地になっているところを見ると、やはり子供のようだ。

紫がマーテルをちびちびと飲んでいるところで、天子がそれを見た。

「あら紫、それは一体何かしら？」

「お子様にはまだ早いわよ、コニヤックのエクストラなんて」

「だ〜から〜、私は子供じゃないの！」

ムキになって、天子は自分のカウンターに置かれているカクテルを一気飲みした。

「ちよつと、そんな一気飲みしたら・・・」

「うあああ」

額を抑え、カウンターに突っ伏した。

「く・・・くらつときた・・・」

「だから言ったのに・・・」

「霖之助さん、この子にもう一杯、軽いのを」

「はいはい、畏まりました」

クレーム・ド・カシス、テキーラ、ジンジャーエール、ライム半個  
ハイボールグラスにクレーム・ド・カシスとテキーラを注ぎ、氷で割る。

そして仕上げてジンジャーエールで満たし、ライムをグラスへ添えて。

「・・・はい、『エル・ディアブロ』。大分飲みやすいと思うけど」

「そうは見えないわね・・・」

「普段は、これは紅魔館のお嬢様にしか出さないんだけどね」

「吸血鬼は紅が好きってこと？」

「そうらしいね」

軽めだが、一応ロングカクテル・・・そう一度に多く飲めるものではない。天子は軽く一口飲み、

「・・・見た目に合わず、私好みの味だわ。薫りはそれほどじゃないけど」

と呟いた。

あ、と思い出したように紫は指を立てる。

「そう言えば天子、霖之助さんに酔った勢いで話したいことがあったんじゃないかしら」

「え・・・僕にかい？」

その言葉を聞いて、霖之助は少々、驚いたようだ。

「知り合いじゃ、みんな茶化したり笑ったりするから、アテにならなくて・・・紫に相談したら、貴方なら大丈夫かもって」

じと　　つとした目で紫を見る霖之助。

「・・・そんな目をしないで頂戴」

「どうして僕なんだ？」

「『今の』霖之助さんは・・・何だか頼っても大丈夫な雰囲気なのよね。相談したら、まじめに答えてくれそうだから」

はあ・・・と深く、霖之助は溜息をつく。

「それで？　僕に相談って？」

諦めたように、天子の話を促した。

「あのね・・・私、好きな人がいるの」

恋の悩みか・・・まあ、これくらいの少女なら恋くらいしてもおかしくはないか・・・と、霖之助は聞く体制に入る。

「どれくらいになるんだい、想い始めて」

「もう半年くらいかしら。何してても、あの人のことしか考えられなくて。でも、彼は私なんて眼中になくて・・・」

次第に涙目になっていく天子に、霖之助は特に動じることもなく。

「ああ、霖之助さん。言い忘れてたけど、天子は泣き上戸だったわ」

「言わなくてもさっきわかったから」

ひくつ、えぐつ、と啜り泣きながら、天子は続ける。



「彼を見てるとね、熱くなるの。顔とか、胸の奥とか・・・」

「それが恋っていうものだから」

「それでね、ぐちゃぐちゃになるの。頭の中が、全部」

「・・・」

「どうすれば彼と仲良くなれるのか、わからなくて・・・お願い、何かアドバイスして・・・」

親密になるため・・・か。泣き上戸は、普段気を張って負けず嫌いを気取っているものだが、流石にここまでになると男性と親しくなるのは至難の業ではないだろうか・・・と霖之助は考えた。

「とりあえず僕から言えるのは・・・一度気持ちに整理を着けて、一歩踏み出してみたら？ って事くらいだから・・・そこからは自分で頑張ってみなよ」

「・・・うん・・・」

「その彼の事を考えて、どんな人かな・・・とか、何処が好きなのか・・・とか考えて、意識し過ぎない程度になってから話しかけてごらん。きっと、少しでも近づけるはずだから」

と言いつつ、シェイカーをカシヤカシヤと振っている。

材料比率はテキーラ5：ホワイトキュラソー2：レモンジュース3・・・

・・・代表的なものより酸味の強いマルガリータだ。

空になったハイボールグラスを拭き、ライムでグラスの縁を軽く湿らせる。そしてそこに軽く砂糖を付けてから、シェイカーからマルガリータを注ぎ込んだ。そして砂糖をバースプーン一本分つけ、溶かし込む。

「・・・あら、随分と型破りなマルガリータね」

「名づけて『大人と子供の恋の違い』。まあ、天子さん、とりあえず飲んでみなよ」

「・・・」

軽く一口。

あ・・・と、天子が軽く声を漏らした。

「甘酸っぱい。何か、辛いって言うより甘い方が強い感じ。えと・・・」

・形容しづらいわね」

「だろうね。さ、二口目を」

霖之助は促し、もう一度天子は口をつけた。

「あら……さつきより酸っぱいわ。なんていうのかしら、こつちがほんとに甘酸っぱいと言うか……さつきの砂糖のせいかしら、少し強く柑橘系の味がするわ」

口元を指で隠し、驚きの表情を見せる天子。それに霖之助は、優しく説明する。

「まず一口目は『子供の恋』……想い人に淡い夢と甘い理想を重ねて、現実をほとんど見ない幼い恋」

「あ……」

「君は、彼のどんなところが好き？」

「えと……かつこよくて、何でも出来て、優しいところ……」

「それは、彼の『現実』を見た末の答えかな？」

「遠くから見てて、そう思ったから……きつと現実」

ふつ、と笑い、霖之助は続けた。まるで『それは子供のする恋だよ』というように。

「二口目は『大人の恋』……本当にその人のことを好きになれる、その人の全部を好きでいられる恋。押し付けの理想じゃない、その人を本質から好きでいられる恋。だから、こんなにも甘くない……それが、本当の恋だと僕は思うな」

その柑橘系特有の微かな苦さは、理想と現実を知ったときの迷い、苦しみ。その強い酸味は、現実を取ったときの辛さ。最後に残る僅かな甘さは、形容しがたい仄かな愛情。

「気持ちに整理をつけて、彼のことが本当に好きかどうか見極めてから、行動に移るといい。それでも、何も遅いことはないんだから」

「……流石は霖之助さん、見事なアドバイス。  
と、紫は感心していた。」

「・・・帰るわ」

「あら、もう帰るの？ 寂しいわねえ」

「これ以上飲んでも、悪酔いするだけだろうし。霖之助さん、紫にツケといて」

「はいはい、わかりました」

呆れたように笑い、天子のグラスを洗い始めた。  
じゃあね、と気だるげに天子はでていった。

「・・・・・・・・・飲ませすぎたかしら」

「そうだねえ・・・少し」

再びヴァン・ド・ターブルを口に運び始める霖之助。

紫は相変わらずマーテルをちびちびとやっているようだ。

「それにしても、『今の』霖之助さんはやっぱり凄いわ。昼間とのギャップが」

「どうギャップがあるのやら」

「そりゃあ・・・相談にまじめに乗って、あんな私でも驚いちゃうような答えを出すんだもの。ギャップを感じないほうがおかしいわ」  
ハイボールグラスをゆらゆらと揺らし、それを眺めながら呟いた。

「・・・で、ものは相談だけど」

「？」

「私のもツケといて」

「それは出来ないね」

「じゃあ、灯油と交換ね」

「ならいいよ」

『真夜中の香霖堂』、長い夜は更けてゆく。

それから幾日の後・・・・・・・・・・。

「ども・・・」

比那名居 天子は、再び『真夜中の香霖堂』に現れた。  
今日は珍しく、誰も来ていない日であった。

「やあ、ご無沙汰だね」

「そうね」

「まあ、どうぞ」

と言う前に天子は踏み出し、カウンターに座る。

前に見たときより少し大人びて見える。何かが吹っ切れたようなものも感じる。

「何か、軽いのを」

何処となく哀愁を漂わせるその声は、以前の少女からは想像もつかない。

「畏まりました」

ラム酒にライムジュース、ついでにガムシロップを適量。

シェイカーに氷を入れて、軽くシェイク。

「・・・・・・ダイキリ。だいぶ飲みやすいと思うけど」

カクテルグラスに注ぎ、天子に差し出した。

「ありがとう」

一口で飲みきり、ふう、と息をつく。

「貴方に言われた通り、自分の気持ちに整理をつけてみたの。それ

でもやっぱり好きだったから・・・その、一步踏み出して、告白してみたの」

「?!」

霖之助は、思わず飲んでいたパヴィヨン・ブラン・デュ・シャトー・マルゴー（一級に至らなかったシャトー・マルゴーの中でも、特に辛口な白種）を吹きそうになる。

（いくらなんでもそれは踏み出し・・・いや踏み切りすぎだろう?!）

「で・・・?」

「当然、駄目だったわよ。彼、恋人がいたわ」

「それは・・・」

「でもね、何か不思議とすっきりした。吹っ切れたって言うか」  
頬杖をついた天子は、心なしか少し笑って見えた。

「よく考えたら、彼ってただのすかした気障野郎だったわ。後になつて、自分の馬鹿さ加減がよくわかったのよ」

「・・・僕はそうは思わないよ。君がそうやって誰かに恋をしたから、今の君がいるって考えてみなよ。そう無駄なものでもない気分になるから」

二杯目を注ぎながら、霖之助は『対等な立場』の人間として言葉を返した。

「そうね。無駄なものじゃないにしても、私やっぱり馬鹿な事したわ。今度恋するときは、もっと素敵な人がいいなあ」

「理想は?」

「今のところなし。びびつと来るもんでしょ、そう言うのって」  
力の抜け具合が、やはり少し大人の雰囲気を感じさせた。

「まあ、霖之助さんのおかげで自分を見つめなおせたのかな。ありがとう」

「いやいや、僕はあのスキマに頼まれたただだし」

「そうね。今度紫にも何か言っとかないとね」

あゝあ、と溜息をつき、

「やっぱりしんみりするのは気分じゃなかったわ、と言うわけで私、宴会にいくわ」

硬貨数枚をカウンターに置き、手を振って天子は去っていった。

さらに幾日か後………天界にて。

「天子」

「……？ あら、どうしたの？」

天子が振り向いた先には、顔立ちの整った少年。

以前天子が想いを告げ、それを振った少年だった。

「それが……俺さ、前の彼女に振られちゃって。フリーなんだよね」

「……で？」

少々、天子はいらつときた。

「だからさ、お前と付き合ってたやつても、いいかなあって」

「笑わせないで、粹がるんじゃないわよ。いつまでもあんたみたいな馬鹿を引き摺ってると思うんじゃないの」

とん、と天子は少年の額をつく。

そして「ふっ」と笑って、

「いつか本当の恋にめぐり逢えたら、あんたも変わるわよ、私みたいに」

と、余裕の言葉を放った。

「へっ………?」

何が何だか分からないこの少年は、目を白黒させっぱなしである。

「形だけの恋愛に意味はないわ。周りがいるから自分も彼女作る・

・じゃ、いつまで経ってもガキのままよ? あんたも、もうちょっ

と大人になんなさい」

「え………ええ?」

「ふふっ、じゃあね」

にこっ、と笑って、天子は歩き出した。

少年はその姿に、

「………きれ、い………」

確かに惹かれていた。

方法こそ荒削りだが、彼女は確かに『子供』ではなくなった。また

一つ、何かを手に入れた。霖之助は、それに携わったことを確かに感じていた。

月明かりのみが僅かに差し込む、午前零時の魔法の森。

そこには、人の背中を少し、押してくれる青年がいると言う

## Case 1：八雲 紫・比那名居 天子（後書き）

この天子のお話のテーマは

「天子のちよっぴり大人の恋だから子供じゃないってば！」です。

発案は・・・

ある日、僕は父と『Polco Rosso（『紅の豚』主人公の名前）』とひっそり書かれているおしゃれな欧風喫茶に入ったことから。

その雰囲気のかな、ふと僕は思います。

「東方でもこう言うの、つくっていいんじゃない？」

そしたらもうやめられない止まらない

プロット・本文合計11時間で完成。

一話分書いたので早速投稿したさいであります、ハイ。

多分これは七話くらいあると思うので、続きとかお付き合いいただけたら感謝のいたります。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5624f/>

---

真夜中の香霖堂

2010年10月8日13時07分発行